

「天平六(734)年十月遣唐使多治真人広成など多禰島(種子島の意)に漂着す」と続日本紀に記される。この船は中国から奈良の都に向かう遣唐使船四艘の一艘で、僧玄昉が乗船していた。航海途中、東シナ海で大暴風雨に襲われ、僧玄昉は「海龍王経」を読経し、無事を一心に祈った。すると、僧玄昉の船だけはかろうじて種子島に漂着することができた。翌年春、無事に帰国を果たすと都の人々は「海龍王が僧玄昉の船を護った」と信じ、平城京(奈良の都)の一隅に「海龍王寺」を建て、由緒に種子島漂着を強く説き、遣唐使の航海安全の祈願寺となった。海龍王寺は光明皇后が創建したと伝える。



平城京出土の
多禰島の木簡

その後も、天平勝宝六(754)年正月吉備真備の船、十一月鑑真和上の遣唐使船が益救島(屋久島)に漂着する。当時、屋久島は多禰国の一部であり、相次ぐ遣唐使船の漂着に役人らは奔走したに違いない。遡ること大宝二(701)年薩摩・多禰は叛乱を起こし、大和朝廷は兵を出して平定する。薩摩・多禰は大和朝廷の南島征服に抵抗するも、和銅三(710)年それぞれ大和国に吸収、埋没していく。僧玄昉の漂着は多禰国建国から24年後のことである。最大の謎は、当時の多禰国の位置は何処にあったか?である。国上説・西之表説・中田説・下中説・島間説・移動説などと諸学兄により、長く論じられてきたが、未だ特定されていない。貝の装飾品を身に纏った人々(広田遺跡)に後続する時代、大和朝廷に抵抗した多禰の人たちの様子が気になる。

ともかく、全国で多禰国(島)分寺だけが不明である。今後の発掘調査に期待を寄せている。(了)

『西之表市史』近世部会では、江戸時代から幕末維新时期までの期間を扱います。種子島家当主の16代久時(慶長)から25代久尚(慶応)までの治世です。近世執筆内容の構成は、①歴代当主の系譜・治績(職制、職掌、行政)、②一所持の支配形態(私領主、居城・城下、地方)、③薩摩藩と種子島家の政治的・人脈的・結婚関係、④種子島の地域経済(石高変遷)、⑤種子島の外交(琉球、漂流対応)、⑥種子島の宗教・信仰(法華宗、民俗)、⑦種子島の法制(犯罪、幕府・藩流人、島内犯罪者の流罪先)、⑧種子島の人口推移(災害を含む)、⑨種子島の文化(武芸流派、種子鋏、和歌、行事)、⑩種子島家譜編纂事業(三大家譜事業、武家家譜)、⑪松寿院の政治、⑫種子島の災害(災害、祈り)、その他の多様なテーマに挑戦し、解明に努力します。種子島家は島津本家に次ぐ、島津一族・重臣家等17家の一つであり、独立・特異な職制や政治が認められ、藩政では家老職にも就く中枢を担っています。また、テーマのご提案や史資料をご所蔵の方は是非事務局にご連絡ください。みんなで自分たちの郷土史を製作し、子供たちに伝えられたらと思います。ご協力ご支援をお願いいたします。



<近世部会長:徳永 和喜>

令和3年6月25日発行 第5号 [発行] 西之表市 [編集] 企画課 歴史文化活用係
〒891-3193 西之表市西之表 7612 番地 電話 0997-22-1111 (内 211) FAX 0997-22-0295



立山校区

羽生右京と狩猟伝承～その痕跡を辿る～

5月23日(日)、立山小学校前に調査隊が集合しました。今回の調査の目的は、羽生右京の居住地跡とアテ(獲物を獲るための落とし穴)の探索でした。

今からおよそ500年前、浜津脇から立山、安城に至る広大な地域を羽生右京という人物が支配していました。羽生右京は屋久島から種子島へ入ってきたのですが、最初立山に居を構えたと伝えられています。立山校区執筆担当の小倉良光さんは50年ほど前、当時の立山小学校長の木原先生や立山の歴史に詳しく先輩方と一緒に、右京が立山で暮らしていた場所を探しに出かけたと言います。当時の記憶を思い出し、行く手を阻む藪を掻き分け進んでいくと、不自然に開けた場所に出ました。眼下には広大な太平洋。右京もこの景色を見ながら慣れない種子島での生活を送っていたのでしょうか。数々の遺跡発掘に携わってきた経験のある鮫嶋図書館長は、中世の山城で利用される縄張りが見えると言います。今後さらなる調査が期待されます。



アテを見つけた調査隊

立山在住の武田宗吉さんは幼い頃、おばあさんに「あの山はアテがあるから気をつけるように」と言われていたそうです。武田さんの案内で現地に向かった調査隊は、畑の土手の間に掘られたアテを発見しました。長年の風雨による土砂、枯れ葉で穴はほとんど埋まっていますが、昔は深さ2メートルほどの大きな穴で、イノシシを捕獲するためのものであったそうです。立山の歴史と自然に思いを馳せる1日となりました。

古文書が語る江戸時代の上西の暮らし

花里崎集落 長野正育さんの御実家に江戸～明治時代の古文書が保管されているという連絡を受け、6月12日(土)にお宅を訪問しました。ご厚意により古文書を拝借し、事務局でデータ化作業を行いました。保管されていた文書には、旧上西之表村の名寄帳など土地に関するものが多く見られました。長野家が上西の中で昔どのような職を務めていたのかは御子孫の方々も伝え聞いておらず、その詳細については不明ですが、残された古文書から当時の上西の様子を垣間見ることができます。

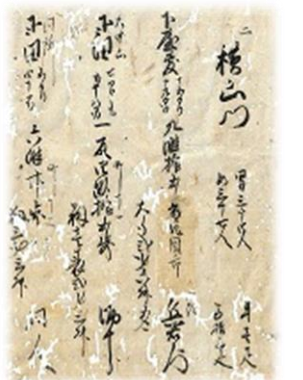


長野正育さん

例えば横山は男性34人、女性37人。牛を1匹、馬を13匹飼育していたことが読み取れます。誰がどこに土地をどのくらい持っていたのか、など暮らしの一部も見えてくるのです。

長野家には、明治時代の漢学者西村天囚の書(掛け軸)も残されており、大変貴重な資料を見せていただきました。ありがとうございました。

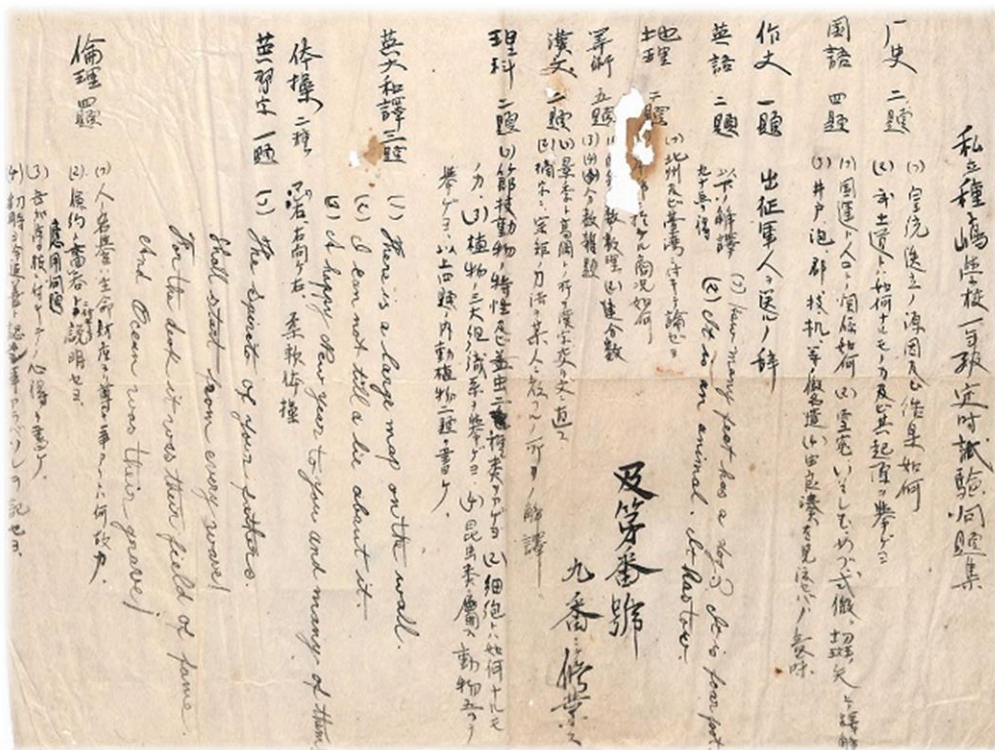
上西校区



長野家文書
「横山門」の文字が見える

古資料・写真のご提供 ありがとうございます。

まだまだ募集しています！ご連絡ください！



◀ 私立種子島学校定期試験問題
(日高京子さん)

どんな問題を解いていたのでしょうか。当時の教育レベルをうかがい知ることができる貴重な資料です。



上西郷土芸能写真 (榎本道隆さん)



種子島神社敷地の写真 (野邊まち子さん)



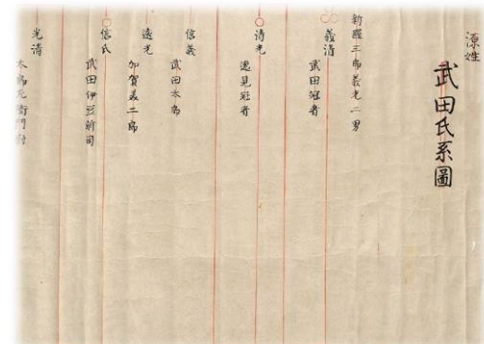
現和尋常高等小卒業写真 (吉田雄二さん)



現和字絵図 (池亀サダ子さん)



西之表高等女学校アルバム
(前田和徳さん)



武田家系図 (武田望さん)

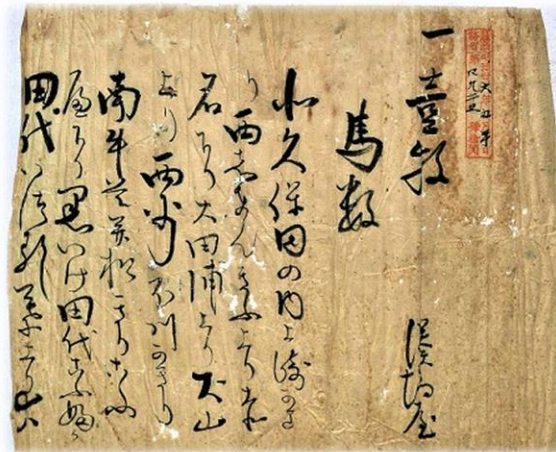


大正時代の日記
(本城輝勇さん)

ご家庭に眠ったままの資料が、今まで分からなかった本市の歴史をひもとく手がかりになるかもしれません。ボロボロだし、読めないし…と思っても処分する前に企画課へご連絡ください！

「牧」に関する調査を行っています

かつて「牧」があった集落の調査に取り組んでいます。明治初期には島内に62か所あったと言われる「牧」。集落に残されている古文書や地名の聞き取り調査を行うことによって、その実態に迫ろうとしています。



牧の境界を示す古文書 (湊神社)

古文書には現在使われている字(あざ)名ではない通称の地名も出てきます。また、地名には、「車門」や「オロ」など、かつての牧の名残を彷彿とさせるものもあります。〇〇の畑、〇〇の田んぼ…。例えばこういった地名は、畑や田を作らなければその名前を口に出すこともなくなってしまい、やがて地元の人々にも忘れられていくでしょう。昔のことをよく知っている方がお元気なうちに、記録しておく必要があります。



湊集落の牧の神



柳原 牛牧を案内する永田章さん
付近には牛神を祀る場所もあったと言います。



牧印(耳の切り方)を示す古文書
(上石寺財産管理組合)



製塩の様子を表す掛け軸
(浜脇神社)



集落の神社係の方など、多くの方々にご協力いただきました。本当にありがとうございます。大崎、沖ヶ浜田、浅川、川脇、能野、御牧など、牧があった集落はまだあります。今後の調査にご理解ご協力をお願いします。